

## 一行と星宿信仰

田 中 文 雄

### 一、はじめに

一行とはいかなる僧であろうか。先行研究でも明らかのように、俗名は張遂、諡號は大慧禪師、一行禪師あるいは一行阿闍梨と尊稱され、弘道元年（六八三年）に生まれ、開元十五年（七二七年）十月八日年に遷化した。

一行は普寂から禪を、悟真から律を學び、更に天台と密教を學んだ。特に密教は金剛智と善無畏から學び、善無畏と共に『大毘盧遮那成佛神變加持經』七卷を翻譯し、筆受者の一行がその内容を解説したものが『大日經疏』二十卷である。經典や儀軌の相承を示す「傳持八祖」の

一人として、衣中に印を結ぶ姿で長く尊崇されている。

また、一行は天文學者としても名を残している。それまで使用されていた「麟德曆」が日食豫報に不備があるため、『開元大衍曆』五十二卷を作成した<sup>①</sup>。他にも、一行の著作とされる曆關係文獻や翻譯とされる佛典は多い<sup>②</sup>。

日本では、これらの一行の實像とは異なる説話もある。『平家物語』卷第十二句「明雲歸山」には、「一行は玄宗の持僧で、讒言による楊貴妃とのいわれなき浮き名で、果（火）羅國<sup>③</sup>へ流罪となり、最惡の道（暗穴道）を進んだ。七日間、暗闇を進む困難な状況を、天道は哀れんで、九曜を現して照らす。一行は右指を噛み切り、左の袂に

九曜のかたちを寫した。九曜曼荼羅は、日本・中國の眞言の本尊である<sup>(4)</sup>といった内容である。楊貴妃は、開元七年（七一九年）に生まれ、至徳元載（七五六年）に死亡したのだから、一行の没年には八歳であり、歴史的に辻褄が合わない。また、「九曜曼荼羅」は一行自身が右の指を食いちぎって寫したなども荒唐無稽な話である。

これは日本だけでの虚像なのだろうか、中國でも既にその祖型はあったのだろうか。一行の生涯を史料と、『梵天火羅九曜』を検討しながら、北斗や九曜への信仰を明らかにしたい。

## 二、中國典籍にみえる一行

一行の傳記は、『舊唐書』<sup>(5)</sup>、『宋高僧傳』<sup>(6)</sup>、『三教源流搜神大全』<sup>(7)</sup>、『神僧傳』<sup>(8)</sup>に記述がある（ただし、『三教源流搜神大全』と『神僧傳』の内容は、『宋高僧傳』とほぼ同じ）。

これらは一行の死後に記述された傳記文獻であるから、完全な實像とは言えないが、ある程度信頼性がおける史料となる。

『舊唐書』列傳第一四一方伎では、以下の三點を記述する。（下記は概要、原文は注に示す）

①「出自と學問、道士との交友、出家」<sup>(9)</sup>

・一行の俗名は張遂、魏州都督（鄴國公）公謹の孫、武功令・擅の子である。若いときから博く經史を學び、天文曆學や陰陽五行に最も精通していた。

・一行は、博學で古典を多く持っていた道士の尹崇に揚雄の『太玄經』を借りたが、數日で返却した。尹崇は「この書は奥深く、長く研究したが明らかに出来ないで、貴方に更に研究して貰おうとしたが、何ですぐに返したのか」と尋ねた。これに對して一行は「その内容を究めたからです」と言い、『大衍玄圖』と『義決』一卷を示した。尹崇は驚き、一行とそれらの典籍について談じた。これによって、一行は「後生の顔子」（顔子の生まれ變わり）として、大いに名が世に知られた。

・（唐の權臣）武三思は一行の學行を慕って好誼を求めたが一行は隱避し、出家して僧になるため嵩山に隱れ

沙門普寂に師事した。

・睿宗が即位すると、東都（洛陽）に留まるようにとの敕命を韋安石に持って行かせたが、一行は病を理由に固辭した。後に荊州の當陽山に止住し、沙門悟眞に梵律（戒律）を學んだ。

② 「宮廷との關係、著作と諡號」<sup>10)</sup>

・開元五年（七一七年）、玄宗は一行の族叔の禮部郎中・張洽に命じ、敕書を持たせて荊州に赴かせ（敕命を）一行に強いた。一行は京に至り光太殿に置かれ、玄宗はしばしば國家の安全と統治の方法を尋ねるために訪れたが、一行は隠すことなく直言した。

・開元十年（七二二年）、（玄宗の娘）永穆公主が降嫁する時、太平公主の故事にならって厚遇しようとした。

一行は「高宗の末年は一女（太平公主）だけだったので特別な禮遇をしたが、そのため太平公主も驕り高ぶりついに罪をえた。そのような婚禮を前例としてはならない」と言った。玄宗はこの進言を入れ、普通の婚禮でおこなった。一行の諫言はこのようであった。

・一行には『大衍曆論』三卷、『攝調伏藏』十卷と『天一太一經』、『太一局遁甲經』、『釋氏系錄』の各一卷の優れた著述があった。當時の『麟德曆經』の曆の計算にみだれが生じ、一行は前代の諸家の曆法を考察して新しい曆に改めるように命じられた。一行は府長史の梁令瓚や工人（作業員）を率いて「黃道游儀」を創り、七曜の行度（運行）を考察し相互に證明した。一行は『周易』の大衍の數を推考し、『開元大衍曆經』を撰述した。

・開元十五年（七二七年）に一行は四十五歳で遷化し、『大慧禪師』の諡號を賜った。

③ 「後魏書」の補填、玄宗の供養、天臺山での逸話、道士の言葉」<sup>11)</sup>

・一行の従祖の東臺舍人・張太素は『後魏書』一百卷を撰述したが、『天文志』が未完成だったので一行はこれを完成させた。

・玄宗は一行のために碑文を作り、自ら刻書し内庫錢（手許金）から五十萬を出し、（供養の）塔を銅人原に

作った。明年（開元十六年）、（玄宗は）温湯に行幸し

塔前を通り、騎兵を駐在させ、品官（官僚）に塔にいかせて、塔での出豫（秋の出遊）の意を告げ、更に絹五十匹を下賜し、塔前に松柏を植えさせた。

・一行は師を求め、「大衍」を究めようと天臺山國清寺に至った。一院があり古松十數本が植えられ、門前に水が流れている。一行はその間に立ち、寺僧が庭で布算する聲を聞いた。その人は「今日、弟子が遠くから私の算法を求めにくるというが、すでに門前に來ている。誰かいないか」と言い、一算を除き「門前の水が西に流れば、また弟子が來る」と言った。一行はその言葉を承けて入って深く拜禮して法を請い、その術のすべてを受けた。門前の水は果たして西に流れた。

・道士の邢和璞は、かつて尹愔に「一行は聖人だろうか。（傳説的天文學者の）洛下閎が曆を造って『今後八百年で一日の誤差が出るが、聖人が必ずこれを正す』と言った。今年はその時期で、一行が『大衍』を造りその誤差を正した。洛下閎の言葉は信じるに足る。一行は

聖人だ」と言った。

『宋高僧傳』では、以下の六點を記述する。

①「出自、出家（禪と律）、才能、學問の系統（律と陰陽識緯）」

・釋一行の俗姓は張で鉅鹿の人、俗名は遂、唐初の佐命（補佐役）の郟國公・公謹の支孫である。二十歳の時には群をぬいて聰明で、老成の風があり、書物を一度讀めば暗誦できた。

・普寂禪師は禪を修行し、歸依するものが多かった。（二行は）世の儂さを悟り、禮をつくし普寂を師として剃髮出家し、誦する經法を諳んじた。

・普寂はかつて大（法）會を催し、遠近の沙門が集まり千人を超えた。その時、徴士の盧鴻が別峯に隱居していた。（盧鴻は）學識に富み、朝廷は厚く遇したが最後まで辭退した。大會の主事は、廬に邑社を贊する序を請うた。この日に盧鴻は文を袖から出し机に置いた。鍾梵が鳴り、盧鴻は普寂に「私の數千百言は、通常で

ない字を用い、文字も古風です。優秀な者がこれを弘めるなら、直接指摘して授けましょう」と言ったので、普寂は一行を呼んだ。(一行は)紙を延ばして微笑んで机に戻したので、廬鴻はその輕脱な行動を怪しんだ。僧が堂中にあつまると、一行は袂を拂って進み「一つも遺漏がない」と大きな聲で言った。廬鴻は愣き感嘆し、普寂に「あなたがよく教導出来るものではない。

遊學をほしいままにさせるべきだ」と言った。三學の名師で一行に諮問しない者は稀だった。

・そのような理由から、當陽に行き僧眞の『律藏序』編纂にあわせ、一行は深く毗尼(律)に通じた。しかも陰陽讖緯の書があれば、みな詳しく研究した。算術のことを尋ねて數千里、名を知られた者のもとに行き相談した。

②「天臺山の逸話、玄宗との關係、道士の贊辭、洛下閑の豫言」<sup>13)</sup>

・一行は天臺山國清寺に至った。一院が見え古松から數十歩に門があり、溪流が淡然岑寂(靜肅)としていた。

一行は門の間に立ち、院内の布算の擦れ合う音を聞いた。僧は侍者に「今日弟子が遠方から私の演算法を求めに来るであろう」と言った。一算子を除いて、また侍者に「門前の水が西流すれば弟子が来たということだ」と言った。一行はこの言葉を承けて入り、丁重にお辭儀をして法を請いその要訣を受けると、門前の水はまた東流した。

・これにより(賞贊の)聲が、遠近をとわず公卿にも轟いた。玄宗はこれを聞いて詔入し「師はどんな才能があるのか」と問い、一行は「よく記憶する長所しかありません」と答えた。帝は宮中の役人に命じ、宮中の書籍を示させたが、一行はそれらの書物をすべて見おわると、その本を裏返しにした。その書籍を詳しく知っており、もともとから習っていたようであった。數幅を唱えた後、帝は思わず席から降り「師は實に聖人だ」と贊嘆した。質問に對し常と異なる答えをし、災福を占えば掌を指さすように、有益なことを多く語った。

・當時の道術の人・邢和璞は、かつて尹愔に「一行和尚

は眞の聖人だ。漢の洛下閎が造った曆は、八百年に一日のずれが出る。聖人がこれを定めたように、今年がその時期で、大衍歴が出来てその差謬を正した。それを正したのだから、洛下閎の言葉は信じられる。聖人でなければ、誰がこれに預かれたであろうか」と言つた。

③「金剛智と善無畏、曆書」<sup>(14)</sup>

・金剛智三藏に陀羅尼と祕印を學び、佛壇(灌頂壇)に登り法王寶を受けた。善無畏三藏と毗盧(『大日經』を譯し、後の國家での(密教の)隆盛を開き、密藏を傳へ奥義に通達した。睿宗と玄宗はならびに集賢院に入内することを請い、詔をくだし興唐寺に住ませた。一行は翻譯した經典(『大日經』)について、すぐに(解説の)『大日經疏』七卷<sup>(15)</sup>を著した。

・また『攝調伏藏』六十卷、『釋氏係錄』一卷、『開元大衍歴』五十二卷があり、その曆は『唐書』歷律志に編入され刊行されなかつた典籍である。また游儀黃赤二道を造り、鐵を以て基準とし院内で製作した。

④「王媪救濟と星占呪」<sup>(16)</sup>

・王媪という(一行の)隣村の老婆がいて、むかし一行が貧しかったのを何度も助けてくれた。一行は有名になつてからも、その恩に報いようと思つていた。ある日(老婆は一行に)拜謁して「我子が人を殺し死刑になりそうです。師は帝王に重く用いられているから、死刑を減じるように奏上して、母の餘生を穩やかに過ごさせて欲しい」と涙を流しながら言つた。一行は「國家の刑罰については、申し上げても罪を許されることはない」と言い、持僧に命じて若干の金錢を與えて、去るように諭した。媪は刃物を手に「私が隣に居た時には、お互いに助け合つていた。赤子の間も乳を與えたのに、成長したらこの恩を忘れてしまったのか」と罵つた。

・一行は慈愛の心を持って終日樂しまなかつた。算をして(寺に仕える)淨人を召し、「汝は布囊をさげて、なにかし坊の閑靜な場所に正午に座り、囊を投げ生き物を捕らえ、速やかに歸れ」と言つた。次の日、はたし

て猥雑(牡豚)が子豚七頭を連れていた。淨人は手分けして追い拂うと、母豚は走り去り子豚を得た。一行は大きな甕を備え、一(匹)づつ入れて木の蓋で閉じ、六一(七)の泥で封じ、胡語を數偈唱えた。

・明るくなった頃、中官が「司天監(天文臺長)は『昨夜は北斗七座星が全く見えなかった』と奏上してきた。何故見えないのか」と問うた。(一行は)答えて「むかし後魏で熒惑星が見えないことがありました。今(天の)帝車が見えないのは、天が陛下を戒めているのでしよう。身分の低い男女も、もしその所を得ないと、霜が降ったり日照りとなったりします。(帝の)盛徳を感じればこれを退けます。感動させる最たるものは、不遇の死者の骨を葬ることです。釋門(佛教徒)は慈悲に富んでいたので、一切の魔を降します。愚僧のおろかな考えでは、天下に大赦を出すことを願います」と言った。玄宗はこれに従ったので、その夜の占奏は北斗の一星が見え、(續いて)七夜にして當初に歸った。(二行の)術は測りがたい。

⑤「祈雨の呪法と、玄宗の厄難、王朝の行く末の占術」  
開元中に甚だしい干ばつがあり、帝が一行に雨を祈らせると、「器の上に龍の状のものがあれば雨が降る」と言った。中官に命じて内庫の中を探させたが、皆「その類いはない」と言った。數日後一つの古鏡の龍の鼻盤を指さして、「これは眞の龍だ」と喜んだ。すなわち(祈雨の)壇場に入ると一日で雨が降った。その異術が(天に)通じたのだ。

・玄宗は大明宮に居て從容として密かに、(一行に)社稷(國家)の吉凶と、(皇)祚の行く末を質問した。一行は他のことを話題にしたが、遂に「陛下は萬里に行きます」と言い、また「社稷はことごとく吉に終わるでしょう」と言ったので、帝は大いに悦んだ。また一つの金の容器を遺した。形は彈丸のようで、内に物を貯え振れば音が鳴るが、開けることはできないが、緊急なことであれば開くようにと言った。帝が蜀に行幸した時、慌ててこのことを忘れてしまったが、成都に至って憶いだし、開くと中に當歸(漢方で用い「きつ

と歸ると」という名の藥草)があつた。帝は「この藥はこの産だ。師は朕が苦難にあつて蜀におもむき、歸ることを知っていたのか」と言つた。また萬里橋を見て「一行の言葉は超人的だつた」と言い、中官に命じて香を焚き、祝し感謝を傳えた。(後の)昭宗は初め吉王に封じられるが、徳王太子の代になって、唐は(後)梁のために滅ぼされた。ついに一行の言葉通り、社稷は吉に終わつたことになる。

⑥「遷化と諡號」<sup>(18)</sup>

・開元十五年(七二七年)九月に(一行は)華嚴寺で病が篤くなり、小部屋に閉じ隠つた。玄宗はこの夜に夢でその禪居(部屋)を見下ろすと、一行が繩牀(圓座)で、ひっそりと扇を開いているのを見た。明け方に確かめたら、まったく夢で見た通りだつた。そこで京城の名徳に大きな道場(寺院)で、一行のために祈るよ(う)に詔し、(一行の)危い疾病はわずかに癒えた。(玄宗の)寵愛はこのようであつた。

・(玄宗は)十月八日に駕に乗り新豐に幸した。(一行は)

身に疾患はないが一言も話さなかつた。忽然として香水を浴し、衣を換えて跏坐し、正念怡然して、玄宗に別れを告げた後に、本師(普寂)を謁禮して入寂した。時の河南の尹(官員)の裴寬は普寂に謁見した。普寂は「用事があり、大尹とはうちとけてお話しすることが出来ませんが、少しご休息を」と言つた。(裴寬は)付き人と空き部屋で普寂の様子を伺っていたら、(普寂は)正堂を清め香を焚き、黙つて座つてゐる。しばらくして門を連打する音がして、「天師一行和尚が來られた」(僧に天師の號をつけるのは、これが初出であり、天子の師を言う)という聲がした。一行が入つて來て、普寂の足に禮し、耳に口をつけて密談したが、その姿はとても恭しかった。普寂はうなずき「その通り」と答えた。言い終わつてまた禮拜すること三度に及んだ。普寂はただ「そうだ、そうだ、その通り」と言つた。一行は語り終わり、階を降り南室に入つて自ら戸を閉めた。

・普寂は侍者を召して「すぐに鍾をならせ、一行はす

に滅度した」と言った。左右の者は疾走して様子を視たが、瞑目して坐していたので、手をかざして呼吸を伺ったが、すでに絶命していた。四衆の弟子の悲しみ嘆きで、山谷が振動した。遺體は罔極寺に安置されたが、死から葬儀まで十四日間経つても、爪甲（の色）は變わらず、髭髪は更に伸び、喜びにみちていた姿なので人びとは驚いた。

・帝は悲しみ「禪師は朕のよりどころであつた。深い哀慕をもって、喪事は官供とする」と言った。詔して銅人原に葬り、諡號を大慧禪師とし、塔銘を御撰した。天下の釋子（佛教徒）はこれを名譽とした。

『舊唐書』と『宋高僧傳』では、一行は「多くの教團や高僧、道士との關わりがあり」、「曆の編纂や國家の運営にも關與した」ことに對して共通する記述は多い。全く同じではないが取り上げる内容に類似が見られる。具體的には、

1 『舊唐書』①「出自と學問」は、『宋高僧傳』①「出

自、出家（禪と律）、才能、學問の系統（律と陰陽識緯）」に對應する。

2 『舊唐書』②「宮廷との關係、著作と諡號」は、『宋高僧傳』③「金剛智と善無畏、曆書」、⑤「祈雨の呪法と、玄宗の厄難、王朝の行く末の占術」と⑥「遷化と諡號」に對應する。

3 『舊唐書』③「後魏書」の補填、玄宗の供養、天臺山での逸話、道士の言葉」は、『宋高僧傳』②「天臺山の逸話、玄宗との關係、道士の贊辭、洛下閎の豫言」と對應する。

ただ、『宋高僧傳』の④と⑤は、天文曆學というよりは呪術的な行動を記述している。少なくとも、僧傳では占術者としての一行像が記述されていると言える。

### 三、『梵天火羅九曜』

密教經典には星の信仰や儀禮を説くものが多い。その中でも一行譯とされる『梵天火羅九曜』は、『大正新修大藏經』のみに収録され、他の大藏經には見られない。<sup>19)</sup>

また、經題に「火羅」が含まれることから、日本の説話や「九曜曼荼羅」に何らかの影響を與えたのではなからうか。

『梵天火羅九曜』のはじめに、以下のように本經の解説が述べられる。

一行禪師修述。二十八宿在天左轉。數知人犯觸之位。大唐武德元年（六一八年）起戊寅。至咸通十五年（八七四年）甲午。都得二百五十七年矣。梵天火羅九曜及暗虛二星圖在此。但諸星都所在。看之決定。一生吉凶萬不失一神妙之極云云。（大正藏 卷二一 四五九b）

つまり、一行が唐代に著述した星辰の運行を用いた占星術書と云うことである。

九曜とは日・月・火・水・木・金・土の七星に、羅喉（白道と黃道の交點にあたる昇交點）と計都（白道と黃道の交點にあたる降交點）を加えたものである。

本經では「羅喉」・「土星」・「水星」・「金星」・「大陽（密日星）」・「火星」・「計都」・「月天」の眞言や名稱とと

もに、星の吉凶の記述と各星神の圖像が描かれている。更に、「北斗七星呪」と「九執呪」、「蝕神」、續いて「葛仙公禮北斗法」、「祿命書」「吉祥眞言」「火羅圖」と「修法」についての記述がある。

『梵天火羅九曜』は下記のように、各九曜について、眞言が書かれ、續いて神像、儀禮、別名などを述べる。（眞言と神像は注に、他の記述はへ表一に示す）。

- ① 一羅喉蝕神星<sup>(20)</sup>
- ② 二中宮土宿星（王在四季）鷄綏<sup>(21)</sup>
- ③ 三嚙北辰星（水星王在冬三月）<sup>(22)</sup>
- ④ 四西方大白星（金星金神也王在秋三月）<sup>(23)</sup>
- ⑤ 五大陽密日星<sup>(24)</sup>
- ⑥ 六南方火熒惑星（火王在夏三月）<sup>(25)</sup>
- ⑦ 七計都蝕神星<sup>(26)</sup>
- ⑧ 八暮太陰（月天）<sup>(27)</sup>
- ⑨ 九東方歲星（王在春三月）<sup>(28)</sup>

〈表一〉

	星名	供養（供物、時季、方角）	別名	神の形状
①	羅睺蝕神星	錢を用いる、丑寅	羅睺 羅師 黃幡 火陽	
②	中宮土宿星	春巽・夏坤・秋乾・冬艮 季夏月は菓子一盤		其形如波羅門。牛冠首手持錫杖。
③	喃北辰星	中夏の月、油祭、北方	魁星 滴星	其神狀婦人。頭首戴猿冠手持紙筆。
④	西方太白星	仲秋の月 生錢 西方	太白 長庚 那頤	形如女人。頭戴首冠。白練衣彈絃。
⑤	太陽密日星	冬至の日に衆寶を用いる卯辰		神形如外道。首戴驢冠。四手兵器刀刃。
⑥	南方火熒星	仲夏の月に、火を用いる南方	南方熒惑星 四利星 虛星	神形如外道。首戴驢冠。四手兵器刀刃。
⑦	計都蝕神星	深室にて 未申	豹尾 大隱	羅睺帶珠寶。竝日月計都著錦繡衣。／首 隱不見。不見無定形。
⑧	暮大陰	夏至の日、多くの寶玉と水を用いる 申酉		
⑨	東方歳星	仲春の月 多くの寶	攝提	其神形如卿相。著青衣。戴亥冠。手執華菓（葉）。

別の經典、金俱吒（九世紀）が撰述したと言われる『七曜攘災決』（大正藏 No.一三〇八）は、七曜の災厄及び攘災法、十二位と七曜の組み合わせによる吉凶、さらに二十八宿を座標に毎月一日における九曜の位置を記した經典

である。この經に『梵天火羅九曜』と類似した記述がある。各星辰の眞言は、多少の文字の相違（翻譯上の當て字）はあるが、ほぼ同じといってよい。<sup>29)</sup> また、各神像についても幾つかの類似と相違があり、〈表二〉のようになる。

								梵天火羅九曜		七曜攘災決 (一) <sup>(30)</sup>		七曜攘災決 (二) <sup>(31)</sup>
羅睺	土	水	金	日	火	計都	月	木				
	其形如波羅門。牛冠首手持錫杖。	其神狀婦人。頭首戴猿冠手持紙筆。	形如女人。頭戴首冠。白練衣彈絃。		神形如外道。首戴驢冠。四手兵器刀刃。	羅睺帶珠寶。竝日月計都著錦繡衣。		其神形如卿相。著青衣。戴亥冠。手執華葉。				
	形如婆羅門騎黑沙牛。	形如黑蛇有四足而食蟹。	形如天女手持印騎白雞。	形如人而似獅子頭。人身著天衣。手持寶瓶而黑色。	形如象黑色向天大呼。		形如人人身龍頭。著天衣隨四季色。					
	土其神似婆羅門色黑。頭帶牛冠。一手拄杖。一手指前。微似曲腰。	水其神女人著青衣。帶獲(猴)冠手執文卷。	金其神是女人著黃衣。頭戴雞冠手彈琵琶。		宜畫火曜本身供養其神。作銅牙赤色貌。帶噴色。驢冠。著豹皮裙。四臂一手執弓。一手執箭。一手執刀。		形如天女著青天女衣持寶劍。	木其神如老人。著青衣帶豬冠容貌儼然。				

また、『梵天火羅九曜』の後半部(⑩～⑭)は、北斗

信仰と関連づけられる。⑩は「北斗七星明」、⑫「九執

明」の呪が示され、西方起源の占星術書の『聿斯經』

(『都利聿斯經』<sup>(32)</sup>)の引用もある。

⑩北斗七星明曰。曩莫三曼多那羅那羅破左邏咩(四六一

c)

①執明曰。歸命唵藥羅(一)醜涅囉(二)合)哩也(三)合)鉢囉鉢多(二)合)孺底囉摩野(三)娑婆(二)合)賀(四六一c)

②蝕神頭從正月至年終常居二宿

張宿(羅)



尾宿



翼宿



低宿(計)蝕神尾從正月至年終帶居此二宿(以上無異本)按聿斯經云。凡人只知有七曜不晴虛星號曰羅睺計都。此星在隱位而不見。逢日月即蝕。號曰蝕神。計都者蝕神之尾也。號豹尾。若行年到此宿。切須畫所犯神形。深室供養燒錢攘之。即災害不生。若遇惡星須攘之。諸不逆其所犯。即變凶成吉。不信即變吉成凶。遇吉星喜慶重重福德自在。遇惡星災害競生。王侯犯之即謫官降職。但以亥時面向北斗。至心祭拜本命星。切不得向北小便折人壽命。宜思真念善獲福宜財。若不穰之災害競起。(四六一c) 四六一a)

⑬葛仙公禮北斗法 鎮上玄九北極北斗。從王侯及於士庶。盡皆屬北斗七星。常須敬重。當不逢橫禍凶惡之事。遍救世人之襄厄。得延年益算無諸災難。并本命元神至心供養。

皆得稱遂人之命祿。災害殃咎迷塞澁。皆由不敬星像。不知有犯星辰。黯黯而行災難自然來至。攘之即大吉也。祭本命元神日。一年有六日。但至心本命日。用好紙剪隨年錢。用茶菓三疊淨床一鋪。焚香虔心面視北斗。再拜啟告曰。隔居少人好道求靈常見尊儀。本命日謹奉銀錢仙菓。供養於北斗辰星并本命神形。將長是生益壽無諸橫禍。神魂爲安。元神自在。襄年凡驅向遠方。再拜燒錢合掌供養

○破軍星持大直(午生人)

○武曲星賓大東(己未生人屬云云)

○廉貞星不灌子(辰申生人)

○文曲星微慧子(卯酉生人)

○祿存星祿會(寅戌生人)

○巨門星貞文子(亥丑生人)

○貪狼星司希子(子生人)

(四六一a) b)

⑭凡祿命書云云。

屬破軍星人。日食一升餘命八十歲。 男女午年字大京子。

屬武曲星人。日食一石餘命八十五歲。 巳未年男女字大東子。

屬廉貞星人。日食一升餘命八十歲。 辰申年男女字術不隣子。

屬文曲星人。日食四升餘命九十歲。 卯酉年男女字微慧字。

屬祿存星人。日食五升餘命八十歲。 寅戌年男女字祿存會子。

屬巨門星人。日食八升餘命八十歲。 丑亥年男女字貞文子。

屬貪狼星人。日食二升餘命六十五歲。 子年男女字司希神子。

一切如來說破一切宿曜障吉祥真言

唵薩縛諾刹怛羅(一合)三磨曳室哩曳扇底迦俱嚕娑婆(二合)賀

男忌天羅女忌地網慾知衰禍但在行年所犯無不知也 夫人

行年吉少凶多乍可知而迴避不可坐受其災云若莫日

梵天火羅圖一帖(四六二b)

梵天火羅圖一帖(四六二b)

⑬「葛仙公禮北斗法」は、抱朴子・葛洪の從祖父の葛

玄(三世紀中頃)に假託されたものである。年に六度の本命日等をあげ、十二支(生年)との對應も述べる。また、⑭「祿命書」では各星に屬する生まれ年と日に食する量と餘命を記述する。これを整理すれば「表三」のようになる。

「表三」

星名	字△△	字△△	十二支	日食	餘命
破軍	持大置	大京子	午	一升	八十歲
武曲	賓大東	大東子	巳・未	一石	八十五歲
廉貞	不滯子	不隣子	辰・申	一升	八十歲
文曲	微慧子	微慧	卯・酉	四升	九十歲
祿存	祿會	祿存會子	寅・戌	五升	八十歲
巨門	貞文字	貞文字	亥・丑	八升	八十歲
貪狼	司希子	司希神子	子	二升	六十五歲

(字△△)は「葛仙公禮北斗法」、字△△は「祿命書」

⑮敬白大梵天王帝釋天王。閻羅天子五道大神。太山府君司命司祿。十二宮神七曜九執。二十八宿藥叉藥叉女。毘舍遮毘舍支步多那天等。殊別當所鎮守護法善神。若家内守宅諸大小神等。并三千大千世界不可說不可說微塵刹土

六道四生類。某甲願今月吉日良時。設神供無遮供具。其大志者可知心云云。

次勸請 向東方合掌 已上畢。

⑩(已下表紙袖書也今此記之)。一(羅睺大惡)二(土少惡)三(水中吉)四(金中吉)五(日大吉)六(火少惡)七(計大吉)八(月中吉)九(木大吉)。

名一切少天呪法(以右手中指直。餘指作拳。左手亦然。二手合腕去心胸八寸。右手中指少屈。坤左中恩節來去。動令忿)。

諸天通用呪 唵路迦 迦路野曳 娑婆賀

(四六二b-c)

#### 四、佛教の北斗經典

佛教經典で、本命星信仰を最も端的に述べるのは、『佛說北斗七星延命經』(大正藏 No.一三〇七)である。しかし、この文献を普通の佛教經典と考えるのには無理がある。神像と北斗七星の配置圖に合わせた星名、それ

ぞれの「符」が書かれる(大正藏 卷二一 四二五b)。その下段には、對應する干支と、「祿食」の食品名が以下のように述べられる(四二五c)。「厄があれば、宜しくこの經を供養し、本(命)星の符を帯びれば、大いに吉である」という。續く文で、各星の本地佛の名前が、  
 〈表四〉のように書かれる(二四六a)。

〈表四〉

星名	干支	祿食	本地佛
貪狼	子	黍	東方最勝世界蓮意通證如來佛
巨門	丑・亥	粟	東方妙寶世界光音自在如來佛
祿存	寅・戌	粳米	東方圓滿世界金色成就如來佛
文曲	卯・酉	小豆	東方無憂世界最勝吉祥如來佛
廉貞	辰・申	麻子	東方淨住世界廣達智辨如來佛
武曲	巳・未	大豆	東方法意世界法海遊戲如來佛
破軍	午	小豆	東方琉璃世界藥師琉璃如來佛

また、『佛說北斗七星延命經』では、文殊菩薩が説く功德が述べられる。つまり、「現世で福德を得、後世で天上界に生まれる」「地獄を離れ、極樂に轉生する」「魔物を避け、精神が安定する」「よい官職に就くことがで

きる」「病氣が治る」「蓄財ができ、耕作地、養蠶、畜産が榮える」「安産で、子供は端正で長命である」「やっかいごとに妨げられない」といった功德があると記述する(四二六b)。

この經を受持し、供養・轉讀をすれば、現世や死後に功德がある。經自體が一種の「護符」(守り札)だといつてもよいだろう。最も重要な部分は、各星神の名前・神像と、符である。しかし、星神の繪姿は、服装や持ち物から、どう見ても佛教の神像ではないし、道教と同様な漢字をベースにした特殊な文字を護符としている。同じ北斗七星の神名は、他經にもみえる。

『北斗七星念誦儀軌』に、「世尊は衆生に(『金剛頂經』七星品の)八星呪を説いた」と言い、「貪狼と破軍」と二神の名が記述される(大正藏 卷二二、四二四a)。

また、北斗七星による延命息災を祈る『北斗七星護摩法』の爐中觀では、「本命星を中心に置き、六星を伴わせる」として、その啓文に「至心奉啓、北極七星、貪狼巨門、祿存文曲、廉貞武曲、破軍尊星、爲某甲、災厄

解脱、壽命延長、得見百秋、今作護摩、唯願尊星、降臨此處、納受護摩、刑死厄籍、記長壽札、投華爲座」(大正藏 卷二二、四五八b)という頌を載せる。

北斗護摩のマニユアルの『北斗七星念誦儀軌』の啓文にも、「至心奉啓、北極七明娜羅、貪狼巨門、祿存文曲、廉貞武曲、破軍尊星、爲陀(施) 主某甲、災厄解脱、壽命延長、得見百秋、今作曼荼羅、唯願垂哀、降臨此處、納受護摩、擁護施主某甲、災難解脱、壽命增長、所願從心」(大正藏 卷二二、四二四b)と記述される。

これらから考えれば、すでに延命と結びついた七星の役割があったことがわかる。つまり、天文思想に基づくとともに、それが展開した道教の北斗七星信仰の翻案ともいえる。

『梵天火羅九曜』最後の⑭敬白は、「大梵天王・帝釋天王」「閻羅天子・五道大神」「太山府君・司命司祿」「十二宮神・七曜九執」「二十八宿・藥叉藥叉女」「毘舍遮・毘舍支步多那天等」の諸神に願うと述べる(四六二b)。この中の閻魔天子、五道大神、太山府君、司命司祿は

『十王經』にも登場する神である。つまり、道佛混淆の神格である。

この点から『梵天火羅九曜』を考えるなら、他の經典と同じく道教の星の信仰を意識して創られたと言える。<sup>(34)</sup>

## 五、道教の北斗經典

道教の救済思想の中にも、北斗七星への信仰により、人びとの願いを叶えることを説く經典がある。たとえば、『道藏』の洞眞部に収録される『玉清無上靈寶自然北斗本生眞經』（SN四五）には、「天皇大帝・紫微大帝的七幼子は、貪狼、巨門、祿存、文曲、廉貞、武曲、破軍の星である」と記述され、『佛說北斗七星延命經』と同じように、北斗七星の星神を祀って、罪を除き福を祈ることが書かれる。

簡潔な道教經典は『太上玄靈北斗本命延生眞經』（SN六二二）と『太上玄靈北斗本命長生妙經』（SN六二三）である。この二經は、太上老君が永壽元年（二五五年）正月七日に天師（張陵）に傳授したという體裁をと

るが、實際は後世に作られた道教經典である。

上記の北斗經典の成立の下限は、唐から北宋だともいわれる。<sup>(35)</sup> 經典成立の前後關係はどうであれ、北斗や干支が關係する密教經典は、中國の信仰を取り入れた中國撰述經典と言えよう。

さて、『太上玄靈北斗本命延生眞經』では、

北斗第一陽明貪狼太星君、子生人屬之。北斗第二陰精巨門元星君、丑・亥生人屬之。北斗第三眞人祿存眞星君、寅・戌生人屬之。北斗第四玄冥文曲紐星君、卯・酉生人屬之。北斗第五丹元廉貞綱星君、辰・申生人屬之。北斗第六北極武曲紀星君、巳・未生人屬之。北斗第七天關破軍關星君、午生人屬之。

（第四b、第五a）

と本命に當たる生まれ年を記述する。續いて、輔星（北斗第八洞明外輔星君、弼星（北斗第九隱光內弼星君）と三臺（上臺虛精開德星君、中臺六淳司空星君、下臺曲生司祿星君）の神名も明らかにする。

上記は「この眞君名は聞いて得られるものではなく、

持念して心にとどめれば善縁があり、持誦すれば功德は  
はかりがたい」、「そのため、三元・八節・生辰の北斗が  
降る日には、この經を壇上に置き、轉經し齋醮し、威儀  
を保って行道すれば、いつまでも眞性を違えず、邪見に  
におちいることはないし、常に七元眞君の所屬の尊號を  
持誦すれば、善行は圓滿し吉祥も降る」(第五b)とも  
記述する。

同書では「人の性命や五體は、本命星官の掌握するこ  
ろに屬し、本命の神將や本宿の星官は常に蔭ながらた  
すけて、人命をつかさどって、天年(天壽)を保つてく  
れる。凡俗のものは無知で、終身(それを)悟らない。

その本命眞君は、毎年六度人間(界)に降って、降った  
日を本命とし、その期に南陵使者三千人、北斗眞君七千  
神將、本命眞官が駕から降り、衆眞は悉く來て擁護する。  
災いを消し罪を懺いて、福を請い生を延ばし、その力に  
したがって醮(法會)をすれば、福德は増す」(第五a  
とb)と言う。しかも、星神は「毎年六度人間に降る」  
(第五b)とあるのは、『梵天火羅九曜』の「葛仙公禮北

斗法」の「本命の元神を祭る日は、年に六日ある」と軌  
を一にする。

經典の末尾には、家に『北斗經』があれば、「本命は  
眞靈を降し」「宅舎は安寧を得る」「父母は長生を保ち」  
「諸厭は化して塵となる」「萬邪は自ずから正に歸す」  
「營業は稱情を得る」「闔門は自ずから康健」「子孫は榮  
盛を保ち」「五路は自ずから通達し」「衆惡は永く消滅  
し」「六畜は興生を保ち」「疾病は瘡癢を得る」「財物は  
虚耗しない」「横事は永く起こらず」「長く利貞を亨け  
ることを保つ」(第八bと第九a)と利益を羅列する。

『太上玄靈北斗本命延生眞經』は、佛教經典と目指す  
ところは同じである。ただし、この經には星神の圖や符  
は書かれない。これは、それらが祕密に傳授されていっ  
たからであろう。後には、『太上玄靈北斗本命延生眞經  
註』(SN七五二)など注釋書が作られ、神像や符なども  
示されるようになった。

## 六、結語

一行は大日經系の密教の繼承者であり、多くの星に關わる密教經典や儀軌の翻譯者とされる。それは一行が宮廷にも貢獻する天文學者であつたからであらう。當時の天文學と占星術は不即不離の關係である。そのため、正史では特殊技能者の部門に記述され、僧傳でも占星術の側面が強調された。

一行の翻譯とされる星への信仰とその儀禮に關わる多くの密教經典は、實際に翻譯したのではないであらう。譯經にも天文にも通じた一行が、宿星經典を翻譯することとは容易だったので、當人の關與が確實でなくとも「譯」、「修述」とされた。

『梵天火羅九曜』は、インドや西方と中國の天文占星を融和して成立したと考える。七曜や北斗七星は實在の天體であり、中國でも早くから星への信仰や占星術に取り入れられた。それにインド天文學の認識、つまり月の昇交點の羅喉と、降交點の計都が加えられた。九曜への

信仰は、天文認識が混淆したことによって發展したと考える。

また、一行から始まるとされる「九曜曼荼羅」も、独自のマンダラとは考えられない。他にも、九に區劃されるマンダラは「金剛界曼荼羅」に九會があり、「北斗曼荼羅」の中心部も九の數となる。「九曜曼荼羅」も星の九點は、縦でたしても・横でたしても・斜にたしても總和が常に三なる。これは安定した神祕性を示し、圖形的にも重要であつたと考える。

一行に假託された經典の『梵天火羅九曜』は、星供の信仰を廣め、その星への信仰に、土曜は聖觀音、水曜は彌勒、木曜は藥師、火曜は虛空藏、金曜は阿彌陀、月曜は勢至、日曜は千手觀音、計都は釋迦、羅喉は不動明王と本地佛を相當させ「九曜曼荼羅」は成立したと考察する。<sup>(36)</sup>

## \*参考文献

・春日禮智「一行傳の研究…志那古今人物略傳(四)」(『東洋史研究』七(二)・三二―四四 一九四二)

- ・加地哲定「大衍曆考」(『密教文化』第三三、三五號所收 一九五六～一九五八)
- ・水原 一「一行阿闍梨流罪説話の考察」(『駒澤國文』第一四號所收 一九七七)
- ・森田龍徳仙『密教占星法』(臨川書店 一九八三)
- ・岩原諦信『星と眞言密教』(東方出版 一九八八)
- ・長部和雄『一行禪師の研究』(北辰堂 一九九〇)
- ・武田和昭「東寺寶菩提院舊藏星曼荼羅圖殘闕について」(『密教文化』第一八三號所收 一九九三)
- ・蘇 佳瑩「日本における熾盛光佛圖像の考察」(『美術史論集』(神戸大學美術史研究会) 第一一號所收 二〇一一)
- ・宇代貴文「圓形式北斗曼荼羅考―高山寺藏『宿曜占文抄』をめぐって―」(『美術史論集』第一二號所收 二〇一二)
- ・矢野道雄 増補改訂『密教占星術』(東洋書院 二〇一三)
- ・Jeffrey Koryk「漢字圏の文學における西方占星術の要素―東西文化交流における佛教の役割」(駒澤大學佛教文學研究) 第一九號所收 二〇一六)
- ・松下健二「一行阿闍梨」は明雲の隠喩か―延慶本『平家物語』を読みなおす―(學習院大學人文科學研究所『人文』一四號所收 二〇一七)
- ・拙論「星と密教―北斗七星への信仰―」(高橋尙夫・他編『初期密教』春秋社、二〇一三)
- ・拙論「一行禪師説話の背景と假託經典」(『豊山教學大會紀

要「四六號、二〇一八年」(本稿の豫論)

註

(1) 「開元大衍曆」への改曆は、梁令瓚と共に黃道游儀や水運渾象(水力式天球儀)を作成して天體觀測をおこなひ、更に南宮説とともに北は鐵勒から南は交州に至る大規模な子午線測量を行って、緯度差一度に相當する子午線弧長が三百五十一里八十步(約百二十三・七料)という結果を算出し、それらの觀測結果に基づいたといわれる。この「大衍曆」は、日本には遣唐留學生・吉備眞備により天平七年(七三五年)に輸入され、百年間にわたって用いられた。

(2) 『舊唐書』(九四五年) 方伎傳

『大衍論』三卷 『攝調伏藏』十卷 『天一太一經』

一卷 『太一局遁甲經』一卷

『釋氏系録』一卷 唐・張太素撰『後魏書』(百卷)

の「天文志」

『新唐書』(二〇六〇年) 藝文志

『周易論』卷七 『大衍玄圖』一卷 『義決』一卷

『大衍論』二十卷

李吉甫注『一行易』

『通史』(一一六一年) 藝文略

『六定露膽訣』一卷

『宋史』(一三四五年) 藝文志

『天眞皇人九仙經』一卷 『開元大衍曆議』 十三卷

『大正新修大藏經』

『金剛頂瑜伽中略出念誦經』四卷 (大正藏No.八六六)

『藥師瑠璃伽如來消災除難念誦儀軌』一卷 (大正藏No.九二二)

No.九二二)

『大毘盧遮那佛眼修行儀軌』一卷 (大正藏No.九八二)

『大毘盧遮那成佛經疏』二〇卷 (大正藏No.一七九六)

『宿曜儀軌』一卷 (大正藏No.一三〇四)

『七曜星辰別行法』一卷 (大正藏No.一三〇九)

『北斗七星護摩法』一卷 (大正藏No.一三二〇)

『梵天火羅九曜』一卷 (大正藏No.一三二一)

『曼殊室利焰曼德迦萬愛祕術如意法』一卷 (大正藏No.一二一九)

『金剛頂經毘盧遮那一百八尊法身契印』一卷 (大正藏No.八七七)

(3) トカラ(吐火羅・靺婁・土豁羅・吐呼羅)は、『隋

書』、『唐書』、『大唐西記』に基づきトカールェスタン(アフガニスタン北部、タジキスタン及びウズベキスタンにまたがる地域)とする説もある。また、タイ・メナム河下流域のヴァーラヴァティー(墮羅鉢底)王国に推定する説、『日本書紀』に靺婁國から來朝の記事あり、非モンゴロイドの地域とする説、朝鮮半島の加耶や、僧

伽羅國(獅子國・セイロン島)等と諸説がある。あるいは、黒を表す梵語 *kr̥iṣṇa* に因むか、羅睺暹羅師・計都暹羅師に關わる可能性もあるが、果羅國がどこにあるかは特定できない。

(4) 『新日本古典文學大系』四四(岩波書店 一九九一)

「昔大唐の一行阿闍梨は玄宗皇帝の御侍僧にておわしけるが、玄宗の後、楊貴妃に名を立ち給へり。昔もいまも大國も小國も、人の口のさがなきは、跡かたなき事なりしか共、其疑によつて果羅國へながされ給。件の國へは三つ道あり。林池道とて御幸みち、幽地道とて難人のかよふ道、暗穴道とて重科の者をつかわす道也。されば彼一行阿闍梨は大犯の人なればとて、暗穴道へぞつかはしける。七日七夜が間、月日の光を見ずして行道也。冥々として人もなく、行歩に前途まよひ、深々として山ふかし。只澗谷に鳥の一聲ばかりにて、苔のぬれ衣ほしあへず。無實の罪によ(ッ)て遠流の重科をかうぶる事を、天道あはれみ給て、九曜のかたちを現じつ、一行阿闍梨をまもり給。時に一行右の指をくいひ(ッ)て、左の袂に九曜のかたちを寫れけり。和漢兩朝に眞言の本尊たる九曜の曼陀羅是也」。他の平家物語の諸本では、更に傳承が附加されている。『長門本』では、「楊貴妃は仙女で、安祿山が讒言した。玄宗が貴妃の姿を描かせると、一行は筆を落とし臍下に墨(貴妃も同所に黒子)がつい

た」とある。『延慶本』では、上記加え「貴妃は三摩耶戒を希望したが、一行は菩薩淨戒を授戒した」との記述もある。また、『源平盛衰記』では、「一行が『貴妃の臍下に黒子があるから野邊に死す』、『玄宗の背に黒子があるから思い死する』と占い、兩者の身體に黒子があったため、一行は（貴妃との密通の）嫌疑をうけた。流罪は保留になるが、弟子・賢鑊の讒言で流罪になった」と大幅な説話の展開がみられる。他の演藝においても、能「弱法師」の中のシテで一行説話を挿入したり、平家琵琶の單獨演奏もある。

(5) 五代後晉の劉昫等の奉敕撰で、開運二年(九四五)に完成、全二〇〇卷。本稿は中華書局標點本(第一六册)五一―一〇五一―一三頁に基づく(ただし、句點などは改めた)。

(6) 唐・五代・北宋初期の高僧の傳記を集めた書物のことである。三〇卷、北宋の贊寧による奉敕撰、端拱元年(九七八)の成立。『大正新脩大藏經』卷五〇収録。

(7) 儒佛道の三教の成立と神々や佛菩薩の傳記が七卷にまとめられ、卷六には「一行禪師」の項目がある。本稿では上海古籍出版社の影印本を参考にした。

(8) 『大正新脩大藏經』卷五〇に収録されるが、著者、成立年代は不明である。

(9) 僧一行、姓張氏、先名遂、魏州昌樂人、襄州都督、郟

國公公謹之孫也。父擅、武功令。一行少聰敏、博覽經史、尤精曆象、陰陽、五行之學。時道士尹崇博學先達、素多墳籍。一行詣崇、借揚雄『太玄經』、將歸讀之。數日、復詣崇、還其書。崇曰「此書意指稍深、吾尋之積年、尙不能曉、吾子試更研求、何遽見還也」一行曰「究其義矣。」因出撰『大衍玄圖』及『義決』一卷以示崇。崇大驚、因與一行談其奧蹟、甚嗟伏之。謂人曰「此後生顏子也」、一行由是大知名。武三思慕其學行、就請與結交。一行逃匿以避之。尋出家爲僧、隱於嵩山、師事沙門普寂。睿宗即位、敕東都留守韋安石以禮征。一行固辭以疾、不應命。後步往荊州當陽山、依沙門悟真以習梵律。

(10) 開元五年、玄宗令其族叔禮部郎中洽齋敕書就荊州強起之。一行至京、置於光太殿、數就之、訪以安國撫人之道。言皆切直、無有所隱。開元十年、永穆公主出降、敕有司優厚發遣、依太平公主故事。一行以爲高宗末年、唯一女、所以特加其禮。又太平驕僭、竟以得罪、不應引以爲例。上納其言、遽追敕不行、但依常禮。其諫諍皆此類也。一行尤明著述、撰『大衍論』三卷、『攝調伏藏』十卷、『天一太一經』及『太一局遁甲經』、『釋氏系錄』各一卷。時『麟德歷經』推步漸疏、敕一行考前代諸家曆法、改撰新曆、又令率府長史梁令瓚等與工人創造黃道游儀、以考七曜行度、互相證明。於是一行推『周易』大衍之數、立衍以應之、改撰『開元大衍歷經』。至十五年卒、年四十

五、賜諡曰「大慧禪師」。

(11) 初、一行從祖東臺舍人太素、撰『後魏書』一百卷、其『天文志』未成、一行續而成之。上爲一行制碑文、親書于石、出內庫錢五十萬、爲起塔於銅人之原。明年、幸溫湯、過其塔前、又駐騎徘徊、令品官就塔以告其出豫之意。更賜絹五十匹、以蒔塔前松柏焉。初、一行求訪師資、以窮大衍、至天臺山國清寺、見一院、古松十數、門有流水。一行立於門屏間、聞院僧於庭布算聲、而謂其徒曰「今日當有弟子自遠求吾演算法、已合到門、豈無人導達也」即除一算。又謂曰「門前水當卻西流、弟子亦至」。一行承其言而趨入、稽首請法、盡受其術焉。而門前水果卻西流、道士邢和璞嘗謂尹愔曰「一行其聖人乎。漢之洛下閎造曆、云「後八百歲當差一日、必有聖人正之。今年期畢矣、而一行造『大衍』。非聖人而何」。

(12) 釋一行。俗姓張。鉅鹿人也。本名遂則。唐初佐命剡國公公謹之支孫也。卅歲不群聰黠明利。有老成之風。讀書不再覽已暗誦矣。因遇普寂禪師大行禪要。歸心衆。乃悟世幻禮寂爲師出家剃染。所誦經法無不精諷。寂師嘗設大會。遠近沙門如期必至。計踰千衆。時有徵士盧鴻隱居於別峯。道高學富。朝廷累降蒲輪。終辭不起。大會主事先請鴻爲導文序贊邑社。是日鴻自袖出其文。置之機案。鍾梵既作。鴻謂寂公曰。某爲數千百言。況其字僻文古。請求朗俊者宣之。當須面指擲而授之。寂公呼行。伸紙覽而

微笑復置機案。鴻怪其輕脫。及僧聚於堂中。行乃攘袂而進。抗音典裁一無遺誤。鴻愕視久之。降歎能已。復謂寂公曰。非君所能教導也。當縱其遊學。自是三學名師罕不咨度。因往當陽值僧真纂成律藏序。深達毗尼。然有陰陽讖緯之書。一皆詳究。尋訪算術不下數千里。知名者往詢焉。(大正藏 卷五〇 七三三 c)

(13) 末至天臺山國清寺。見一院。古松數十步門枕流溪淡然岑寂。行立于門屏間院中布算。其聲款款然。僧謂侍者曰。今日當有弟子自遠求吾演算法。計合到門必無人導達耶。即除一算子。又謂侍者曰。門前水合却西流弟子當至。行承其言而入。稽首請法盡授其決焉。門前水復東流矣。自此聲振遐迩。公卿籍甚。玄宗聞之詔入。謂行曰。師有何能。對曰。略能記覽他無所長。帝遂命中官取宮籍以示之。行周覽方畢覆其本。記念精熟如素所習。唱數幅後。帝不覺降榻稽首曰。師實聖人也。嗟歎良久。尋乃詔對無恒。占其災福若指于掌。言多補益。時邢和璞者道術人莫窺其際。嘗謂尹愔曰。一行和尚眞聖人也。漢洛下閎造曆云。八百歲當差一日。則有聖人定之。今年期畢矣。屬大衍歷出。正其差謬。則洛下閎之言可信。非聖人孰能預於斯矣。(七三三 c 七三三 a)

(14) 又於金剛三藏學院羅尼祕印。登前佛壇受法王寶。復同無畏三藏譯毗盧遮那佛經。開後佛國。其傳密藏必抵淵府也。睿宗玄宗竝請入內集賢院。尋詔住興唐寺。所讖之經

遂著疏七卷。又攝調伏藏六十卷。釋氏係錄一卷。開元大行歷五十二卷。其歷編入唐書歷律志以爲不刊之典。又造游儀黃赤二道。以鐵成規。於院製作。(七三三a)

(15) 『大正新修大藏經』では『大毘盧遮那成佛神變加持經』(No.八四七)は七卷、『大毘盧遮那成佛神經疏』(No.一七九六)は二〇卷である。したがって、本文の『大日經疏』は『大日經』の翻譯を指す

(16) 次有王媪者。行鄰里之老嫗。昔多贍行之貧。及行顯遇常思報之。一日拜謁云。兒子殺人即就誅矣。況師帝王雅重。乞奏減死以供母之殘齡。如是泣涕者數四。行曰。國家刑憲豈有論請而得免耶。命侍僧給與若干錢物。任去別圖。媪戟手曼罵曰。我居鄰周給迭互。繡襪間抱乳汝。長成何忘此惠耶。行心慈愛終夕不樂。於是運算畢召淨人。戒之曰。汝曹挈布囊於某坊間靜地。午時坐伺得生類。投囊速歸。明日果有猥穢引豚七箇。淨人分頭驅逐殺母走矣。得豚而歸。行已備巨甕。逐一入之閉蓋。以六乙泥封口。誦胡語數契而止。投明中官下詔入問云。司天監奏。昨夜北斗七座星全不見何耶。對曰昔後魏曾失熒惑星。至今帝車不見。此則天將大儆於陛下也。夫匹夫匹婦不得其所。猶隕霜天旱。盛德所感乃能退之。感之切者其在葬枯骨乎。釋門以慈心降一切魔。微僧曲見莫若大赦天下。玄宗依之。其夜占奏。北斗一星見。七夜復初。其術不可測也。(七三三a~b)

(17) 又開元中嘗早甚帝令祈雨曰。當得一器上有龍狀者方可致雨。敕令中官同於內庫中遍視之。皆言弗類。數日後指一古鑿鼻盤龍。喜曰。此真龍也。乃將入壇場一日而雨。其異術通感爲若此也。玄宗在大明宮。從容密問社稷吉凶并祚運終畢事。行對以他語。帝詢之不已。遂曰。陛下當有萬里之行。又曰。社稷畢得終吉。帝大悅。復遣帝一金合子。形若彈丸。內貯物撼必有聲發之不得。云有急則開。帝幸蜀倉黃都忘斯事。及到成都忽憶啓之。則藥分中當歸也。帝曰。伊藥產於此。師知朕遠難至蜀當歸也。復見萬里橋。曰一行之言信其神矣。命中官焚香祝之。乃告謝也。及昭宗初封吉王。至太子德王。唐爲梁滅。終行之言。社稷畢得終吉也。(七三三b~c)

(18) 開元十五年九月於華嚴寺疾篤。將與病入辭。小間而止。玄宗此夜夢瞻禪居。見繩牀紙隔開扇。曉而驗問。一如所睹。乃詔京城名德。致大道場爲行祈福。危疾微愈。其寵愛如是。十月八日隨駕幸新豐。身無諸患口無一言。忽然浴香水換衣趺坐。正念怡然示滅。一云辭告玄宗。後自駕前。東來嵩山謁禮本師。即寂也。時河南尹裴寬正謁寂。寂云。有少事未暇與大尹款話上。且請踟躕休息也。寬乃屏從人止於旁室伺寂何爲。見潔淨正堂焚香默坐如有所待。斯須叩門連聲云。天師一行和尚至。(僧號天師始見於此。言天子師也)行入頗勿切之狀禮寂之足。附耳密語。其貌愈恭。寂但頷膺曰。無不可者。語訖又禮。禮語者。寂唯

言是是無不可者。行語訖降階入南室自閉其戶。寂乃徐召侍者曰。速聲鍾。一行已滅度。左右疾走視之瞑目而坐。手掩伺息已絕。四衆弟子悲號涕洟撼動山谷。乃停神於閻極寺。自終及葬凡經二七日。爪甲不變髭髮更長。形色怡悅時衆驚異。帝覽奏悲愴曰。禪師舍朕。深用哀慕。喪事官供。詔葬於銅人原。諡曰大慧禪師。御撰塔銘。天下釋子榮之。(七三三c)

(19) その來歴は、「奥書」に明らかたように、長谷寺歡喜院・快道の元本を慈順が校訂し、最終的に江戸末期に根生院・龍肝が手寫したものである。奥書は、「文治五年八月書寫。以四本授之。玄證正徳三巳年。以梅尾本寫之。慧旭寛延四年書之宥證。明和四亥年以御室眞乘院法務前大僧正宥證大和尚本寫授。智積院動潮。寛政五丑年以右本書之。洛北福勝密寺秀陽享和壬戌冬以件本授正上木行於普天。和州豐山長谷寺歡喜院沙門快道記。以傳領之本對授加筆畢。慈順。文政三歲次庚辰季秋朔日以秀陽閣梨去享和三年住豐山之日令密榮傳寫之本於東武湯島根生役寮自手寫授之了。龍肝(年四十三戒三十七)。(大正藏 卷二一、四六二c)

(20) 明日。庵囉戶曩阿素(三合)囉邏惹野塞麻捨觀野曩(名位)扇底伽哩莎婆訶(四五九b-c)

(21) 眞言。歸命唵贊日利曳娑婆賀



又眞言曰。唵捨泥殺作(二合)羅曩乞殺(二合)怛囉(二合)跋囉(二合)訶曩嚙娑野(名位)普瑟底(二合)迦哩娑縛(二合)賀。又眞言。唵戌戎羯囉誡駄囉(二合)囉囉(二合)邏囉(二合)邏若(名位)室哩娑婆(二合)賀(四五九c)

(22) 明日。唵俱悉陀他姪佉利多崖崖紫紫備帝莎婆訶

又明日。唵母駄曩乞殺(二合)娑囉(二合)弭曩(名位)契努(二合)摩莎縛(二合)賀。又心呪曰。唵蘇底哩(二合)瑟吒莎婆訶(四五九c)四六〇a)

(23) 明日。歸命唵吠尾毘娑婆訶又眞言曰。唵戌(上)羯囉誡駄囉駄囉(二合)邏若(名位)室哩娑婆訶(四六〇b)

(24) 眞言曰。曩謨羅怛曩(二合)怛囉夜(引)野曩莫素哩野薩縛曩乞囉(二合)怛囉(二合)羅惹野唵阿謨伽寫(名位)設底(去)莎婆訶



(四六〇b) c)

(25) 火星真言曰。歸命唵摩訶利

多莎婆訶 又真言曰。唵阿訶

羅迦嚩儂野(名位)娑婆(二合)

賀(四六〇c) 四六一a)



(26) 明日。唵縛日羅(二合)計都

曩(引)曩乞殺(二合)怛羅(二

合)邏惹野(名位)吽(四六一

a) b)



(27) 明日。唵戰(上)怛羅(二合)

曩乞灑(二合引)怛羅(二合)邏

惹野(名位)設底莎婆賀(四

六一a) b)



(28) 木星明日。曩謨三曼多沒駄

喃唵印那羅野娑婆訶 又真言

曰。唵婆羅(二合)訶薩鉢(二

合)底曩摩地比跢縛曩(二合)

野(名位)摩攞縛駄(二合)寧婆

縛(二合)賀(引)(四六一b

c)



(29)

〔日天真言〕曩謨羅怛曩(二合)他羅夜(引)野曩莫素哩野

薩縛

曩乞灑(二合)怛囉(二合)囉惹

野唵(引)阿謨伽寫野(名位)設底去莎囉(二合引)賀(引)

〔月天真言〕唵戰(上)怛羅(二合)曩乞灑(二合引)怛羅

(二合)囉惹野(名位)設底莎囉(二合)賀(引)

〔南方火星真言〕唵阿訶囉迦嚩儂野(名位)娑囉(二合)賀

(引)

〔北方水星真言〕唵母駄曩乞赦(二合)怛羅(二合)娑囉弭

曩(名位)契努(二合)摩莎縛(二合)賀(引)

〔東方木星真言〕唵婆羅(二合)訶薩鉢(二合)底曩摩地比

跢曩(二合)野(名位)摩囉囉駄(二合)寧婆囉(二合)賀(引)

〔明日。歸命唵吠尾毘娑婆訶

又真言曰。唵戌(上)羯囉誡駄囉駄囉(二合)邏惹(名位)室

哩娑婆訶(四六〇a) b) 西方金星真言〕唵戌(上)羯囉

(二合)誡駄囉(二合)囉囉(二合)邏惹野(名位)室哩(二合)

迦哩娑囉(二合引)賀(引)

〔中方土星真言〕唵捨泥吃赦作(二合)囉曩乞赦(二合)怛

囉(二合)跋囉(二合)訶(引)摩曩嚩娑野(名位)普瑟底(二

合)迦哩娑囉(二合)賀(引)

〔羅睺星真言〕唵囉曩曩阿素(二合)邏惹惹野塞摩捨都曩

野(名位)扇底迦哩莎囉(二合)賀(引)

〔計都星真言〕唵囉日羅(二合)計都曩(引)曩乞赦(二合)

恒羅(二合)邏惹野(名位)咩娑囉賀(大正藏 卷二十一 四二八c、四二九a、傍線は『梵天火羅九曜』と異なる部分)

- (30) 「日宮占災攘之法第二」では「形如人而似獅子頭。人身著天衣。手持寶瓶而黑色。」(四二六c)とあり⑤にあたる。へ月宮占災攘之法第二」では「形如天女著青天女衣持寶劍。」(四二六c)とあり⑧にあたる。へ木宮占災攘之法第三」では「形如人人身龍頭。著天衣隨四季色。」(四二六c、四二七a)とあり⑨にあたる。へ火宮占災攘之法第四」では「形如象黑色向天大呼。」(四二七a)とあり⑥にあたる。へ土宮占災攘之法第五」では「形如婆羅門騎黑沙牛。」(四二七a)とあり②にあたる。へ金宮占災攘之法第六」では「形如天女手持印騎白雞。」(四二七b)とあり④にあたる。へ水宮占災攘之法第七」では「形如黑蛇有四足而食蟹。」(四二七b)とあり③にあたる。

- (31) 「金其神是女人著黃衣。頭戴雞冠手彈琵琶。」(四四九a)は④、「木其神如老人。著青衣帶豬冠容貌儼然。」(四四九a)は⑨、「水其神女人著青衣。帶獲(猴)冠手執文卷。」(四四九a)は③、「土其神似娑羅門色黑。頭帶牛冠。一手拄杖。一手指前。微似曲腰。」(四四九b)は②にあたる。「宜晝火曜本身供養其神。作銅牙赤色貌、

帶噴色、驢冠、著豹皮裙、四臂一手執弓、一手執箭、一手執刀」(四四九a)は⑥にあたる。

- (32) 『都利聿斯經』。プトレマイオスによるギリシャ系の暦で、漢譯は貞元(七八五、八〇五)年間。

- (33) 『大正新修大藏經』校異による。

- (34) 蕭登福『道教術儀與密教典籍』(新文豐出版、一九九四年)三四七頁に「佛說北斗七星延命經」と道教との關係の解説がある。同様な指摘は、『宿曜儀軌』(三四三頁)、『北斗七星念誦儀軌』(三四四頁)、『北斗七星護摩祕要儀軌』(三四五頁)、『七曜攘災決』(三五二頁)、『七曜星辰別行法』(三五四頁)、『北斗七星護摩法』(三五八頁)、『梵天火羅九曜』(三六〇頁)が記述される。蕭氏は「すべて佛教が道教の北斗經を取り入れた。佛教の北斗關係の經典は全て偽經だ」と主張している。この主張は間違っていないが、前注の『都利聿斯經』の混入からみても、道教經典だけを模倣したのではなく、多くの天文知識が混在した星宿經典から、密教の星宿經典は成立したと考える。

- (35) Kristofer Schipper (*The Taoist Canon, The University of Chicago Press, 2004*) は宋以降とし、任繼愈主編『道藏提要』(中國社會科學出版社、一九九二)では唐末・宋初とし、張繼禹主編『中華道藏』(華夏出版社、

二〇〇三)の解題では宋初とする。

(36) 九曜曼荼羅(高野山靈寶館藏)



寄稿規程

編集委員会

一、寄稿者は本學會員に限り、必ず完全原稿でお願いいたします。枚数制限は以下のとおりです。

論考 四百字詰四十枚程度

研究ノート 四百字詰二十枚程度

書評・新刊紹介 四百字詰十枚程度

国際學界動向 四百字詰十枚程度

なお、論文寄稿の場合には、左記の論文要旨を添付してください。

○外国語による論文要旨

要旨の作成は原著者に一任いたしますが、編集委員会が校正する場合があります。外国語は原則として英語とし、語数は三百語程度とします。中国語表記はウェード方式、あるいは拼音(ピンイン)方式でお願いいたします。

○外国語による論文要旨の日本語原文

投稿に際してはホームページ上の寄稿要項、原稿整理票を参照してください。

○本誌に掲載された原稿は、発行より三年経過した後にウェブ上で公開されます。ウェブでの公開を承諾されない方は投稿時にお知らせ下さい。

なお公開される場合も著作権は執筆者にあります。(詳しくはホームページをご覧ください。)

三、原稿締切は、六月二十日、十二月二十日といたします。

四、内容は未発表のものに限り、採否は、當學會に御一任ください。

五、抜刷を御希望の方は、有償でPDFファイルまたは印刷冊子を作成いたします。

六、特殊製版(圖版・寫真版など)、組み替えなどの費用は寄稿者の負擔となります。

送付先 〒305-8571 茨城縣つくば市天王臺一-1-1

筑波大學人文社會科學研究科 歴史・人類學專攻 丸山宏研究室内

日本道教學會事務局

電話 〇一九一八五二一四〇五〇

E-mail: info@taoistic-research.jp

# 一行和星群信仰

田中文雄

一行（公元 683-727 年遷化）諡號：大慧禪師，又被尊稱為一行禪師或一行阿闍梨。

一行跟普寂學習禪道、跟悟真學習律法，又學了天臺和密教。尤其是密教是跟金剛智和善無畏學的。他跟善無畏一起翻譯了《大毘盧遮那成佛神變加持經》7 卷，一行做筆記，把註解編成《大日經疏》20 卷。一行是“傳持八祖”之一，“傳持八祖”是傳承佛經以及儀軌的人。一行身披法衣，法衣內呈現手印的姿態，他長期受人尊崇。另外，一行作為天文學家也有名。之前使用的《麟德曆》裡所記載的日食預報有不完善之處，所以他編寫了《開元大衍曆》52 卷。但日本的民間傳說文學裡的描述有所不同（巫師，九曜曼荼羅的創立者）。

我重新仔細查閱了正史《舊唐書》和僧傳《宋高僧傳》的終身記錄，明確了其歷史事實。並且考察了有關星群信仰的佛經《梵天火羅九曜》。最後通過與其他的漢譯密教佛經的對比論證了與道教經典之間的影響關係。

結論如下：

- ① 被認為是一行翻譯的星的信仰和有關禮儀方面的許多密教佛經，有可能的確是他翻譯的。
- ② 《梵天火羅九曜》是融合了印度、西方、中國的天文占星術而著成的。七曜和北斗星是實際存在的天體，中國很早就有了星的信仰並掌握了占星術。並且補充進了印度的月亮的升交點的羅睺和降交點的計都的天文學方面的認知。即對九曜的信仰是參雜了天文學方面的認知而發展起來的。
- ③ 被認為是從一行開始的〈九曜曼荼羅〉，我認為並不是他獨創的曼荼羅。此外，被分成 9 部分的曼荼羅裡的〈金剛界曼荼羅〉裡有九會，〈北斗曼荼羅〉的中心部分也是 9。〈九曜曼荼羅〉上的 9 個星的圖案，縱向、橫向、斜向都是 3。表示具有隱定的神秘性，圖形上的價值也很高。
- ④ 一行名義的《梵天火羅九曜》傳播了星供的信仰，而且分配了本地佛，創立了〈九曜曼荼羅〉。